Retro-Future

古くて新しい　もうひとつのヴィンテージオーディオ

ヴィンテージといえば、アルテックやタンノイなどが話題に取り上げられる機会が多い。しかし、当時これらの老舗と肩を並べる、他の多くのブランドがあったことを知る人は少ないだろう。ビンテージ・ショップ「アトリエJe-tee」では、音質はもちろん、デザインにもこだわった「もうひとつのヴィンテージ」を数多く紹介している。本企画では、同店で販売されている製品を中心に、毎号テーマとなるブランドを取り上げている。今号では米国製とはひと味違う英国RCAのホーンスピーカー・システムを紹介しよう。

本文／田中伊佐資

製品解説／岡田圭司（アトリエJe-tee代表）　撮影／小林幹彦（彩虹舎）

第45回　英国 RCA photophon Ltd. London

RCA はアメリカで1920年代に GE（ジェネラルエレクトリック社）の子会社として誕生した。1927年には映画サウンドシステムを主に業務とする RCA Phtophon Inc を設立。当時シェアを争っていた Western Electric と共に世界の映画産業の発展に大きく貢献することになる。その後、英国ロンドンに RCA Photophon Ltd. London が設立され、RCA の欧州でのビジネスが開始する。また、この頃のは Western Electric London も設立されており欧州では 英国のVitawox、ドイツのKlangfim などとともに劇場システムのシェア競争が進んでいった。

MI-6395 Horn System UK

すでにシアター用に開発されていたMI-9548ドライバーとドッグレック型折り曲げホーン MI-6395、当時スタジオモニター用に開発された 38cmウーファー専用キャビネット MI-12424を採用したモニタースピーカー。 UK タイプには LMI-9449 ウーファーが搭載されている。この後期型は高域に紙の振動板を持つトゥイーターが追加されている。 高性能なシアター用のドライバーを搭載した本格的な小型モニターシステムで、折り曲げホーンが採用されているため、近距離での再生音にも立体感がある。当時の RCA がレコード制作などでの録音の現場に向けた意気込みを感じる。

業務用のイメージを払拭させる甘い香りがする英国RCAの音

きちんと数えたわけではないが、この連載で、スピーカーにしてもアンプにしても、RCA社の製品と遭遇する確率が高いような気がする。

しかもマランツだったら何番とかタンノイだったら何みたいに、ある一定のラインに集中しているのではなく、ヴァリエーションの振り幅がとんでもなく広い。いったいどんだけ製品を作っていたのだろうかと思う。掘れば掘るほど、宝の山の大きさがわからなくなってくる。

今回のスピーカーは英国RCAのユニットを使っている。米国製ですら頭のなかで整理できていないから、ますますこの企業の全貌を掴むのが難しい。そのスピーカーは、きれいにレストアされていて、スカーレットとも言うべき赤いフロントグリルが印象的だ。とても華やかだ。「甘い香りがする音なんですよね。ヴォーカルがまたいいんです。そのあたりからいってみますか」と岡田さんはナット・キング・コールの「サムホエア・アロング・ザ・ウェイ」を選曲のトップに持ってきた。

確かにおっしゃる通りですと納得するしかない甘美でジェントルなキング・コールだった。

RCA社は巨大なエレクトロニクス企業だが、オーディオ製品として現存するのは、民生用よりもどちらかというと、劇場、ホール、スタジオなどの業務用システムが多い気がする。よってその音は実直、合理的、安定感抜群みたいなイメージがあり、いかにもプロ用らしく固有のトーンが思い浮かばない。ところがこれは、まるでコンシューマー用とも思えるような独特の情味があった。

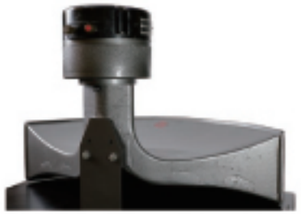
ドライバーの振動板がアルミではなく、フェノール樹脂製だからだろう。岡田さんがしばしば言う「この素材はウーファーとのつながりが良好」という意味を実感した。

120度と開口部が広いホーンもまたいい。ジョン・コルトレーンの『バラード』では柔らかなテナーサックスが左右スピーカー間の中央に定まり、そのふっくらとした音の形状が快い。

そして直角に折れ曲がったホーンも音に寄与している感じがする。省スペースの意味で設計されたのかもしれないが、ドライバーからの音が一度ぶつかってから拡散されているためか耳にやさしい。

エラ&ルイ、ダイアナ・クラール、スティングと声物が続き、一青窈の「ハナミズキ」にはやられた。まさにキラー・チューン。この旋律と歌詞にたっぷりと浸ることができ、オーディオのことは頭の中からすっかり消え去った。

オーディオを忘れていたのに、この名曲を心底味わいたいのなら、このスピーカーは欲しくなるなあといった矛盾をちょっと思ったりもした。



MI-6395 Horn　左端

黒鍋型で造られたアルミ製の折り曲げ型ホーンで500Hz 以上の再生音に対応している。この形状はドッグレッグホーンと呼ばれている。ゴルフの用語としても用いられるドッグレッグは "く" の時に折り曲がった様子から名づけられたようだ。左右の120度ほどの開口部と折り曲げホーンから出る間接音が独特な臨場感がある。

LMIプレート。RCA Photophon Ltd. London と記載された下に RCA CORPORATION OF AMERICA と本社名が入っている

MI-12424 キャビネット

38cmユニット専用に開発されたバスレフ構造の木製キャビネット。 数種類のユニットの組み合わせがあり、38cm フルレンジユニットをはじめ、内部に小型のラジアルホーン&ドライバーと38cmウーファー MI-12432 を搭載した LS-1 システム。 最上位は MI-6395 ／ 9548 ホーン&ドライバー と38cmウーファー 9449 を搭載した ホーンシステムとなる。

LMI-9458 ドライバー

英国とアメリカで共通のシアター用の大型ドライバーで同じマグネットと振動板が搭載されている。フェノリック製振動板が採用され、これはシルクに樹脂のようなニスを塗り固めたもの。 JensenやElectro voice などの中域音、高域音のユニットにも採用されている。アルミ等の金属素材のタイプと比べると、より滑らかで陰影に富んだ再生音が特徴である。

LMI-9449-Aウーファー。英国 RCA で独自に開発された 38cm ユニットである。かなり重量のあるアルニコマグネットを搭載していて、振動板はアメリカタイプ 9449 と比べるとコルゲーションが無く、エッジにはダブルサスペンションタイプを採用。フルレンジに近い特性である。外装は塗装やフレーム、マグネットは全く違う形状をしていて、Tannoy、Goodmans 等の英国製 ユニットによく見られる形状のフレームと似ているので、英国内でのOEM 生産だと伺える。

トゥイーターは紙製の振動板でかなり大きなマグネットが搭載されている

フェノリック製振動板

取材協力：アトリエJe-tee　〒256-0813　神奈川県小田原市前川647-5　1F　☎046-546-9575　ホームページ：http://www.je-tee.com